

# 交通事故被害者の会

第9号 2002年8月20日(年3回発行) TEL 011-233-5130 FAX 011-233-5135

E-mail [hk-higaisha@nifty.com](mailto:hk-higaisha@nifty.com) ホームページ <http://homepage2.nifty.com/hk-higaisha/>

被害者の会は、被害者どうしの支援と事故をなくすための取り組みを目的とした、交通事故被害者や遺族でつくる会です。入会希望の方は事務局に電話をください。会費はありません。年3回の会報が送られ、毎月10日(土日の時は次の日)10時からの例会に参加できます。例会時に電話相談も受け付けています。

発行 北海道交通事故被害者の会  
代表 前田 敏章  
編集人 前田 敏章 内藤 功  
水野 美代子 富岡 裕子  
事務局 〒060-0001 札幌市中央区北1  
西9 ノースキャピタルビル4階

2002/5/18 札幌ガーデンパレス

## 講演記録

# いのちの重さを伝えるために 悪質交通事故で子ども二人を失って

講師 井上保孝、郁美ご夫妻



### プロフィール

1999年11月28日、東名高速道路で酒酔い運転の大型トラックに追突され、当時3歳と1歳の子ども2人を焼死させられる。悪質交通事犯の量刑見直しを訴えて、全国の交通事故遺族らとともに署名運動を展開し、2001年11月成立の「危険運転致死傷罪」新設に尽力。飲酒運転撲滅と命の大切さを伝えるために精力的に活動中。著書に「永遠のメモリー」(河出書房新社)がある。千葉県在住。

### ■ 1999. 11. 28.

私達夫婦は箱根に1999年11月27日から1泊の予定で旅行に参りました。その帰り道の午後3時半頃、東名高速の川崎料金所を過ぎたところで、後ろから追突されて車は炎上し、娘二人は後ろから出ることが出来ずに焼死しました。私自身何とか引っぱり出されたのですが大やけどを負いました。私は助手席に座って寝ており、その当時は何もわかりませんでした。すぐに救急車で運ばれたのですが、25%は熱傷3度、植皮が必要ということで3ヶ月あまり入院しました。今もリハビリを続けています。

### ■ 加害者は飲酒運転の常習者

最初に飲酒運転だったと聞いて、お酒を売っていない高速道路で、しかもまだ明るい時間に、なぜ飲酒運転のトラックが走っているのか、疑問に思いました。捜査状況を聞いたのですがあまり詳しく教えてくれない。それよりも、マスコミの方から次のことを教えて頂きました。

前日フェリーの中に酒を持ち込んで、700mlくらいのウイスキーの6割近くを飲んでいました。フェリーを下りた翌日の朝、東京の近くまで運転してきて海老名サービスエリアで残りのウイスキーと、前日買っていた缶入り焼酎飲料、約250mlを飲み干し、1時間ほどの仮眠を取って再びハンドルを握ったそうです。そして、高速道路の三車線を跨

ぐようにジグザグ運転をして、「あのトラック危ない」という目撃のドライバーが何人もいたにもかかわらず、トラックを止めることが出来ず、結果的に私たちの乗用車に衝突し炎上して止まった。

裁判の中で、加害者は、飲酒運転は過去10年以上常習としていたこと、最初は寝酒として持ち込んでいたが、最近では昼食時にも飲んで、わずかな仮眠を取って運転していたということが明らかになりました。

### ■ 「過失」で懲役4年 命の重みを反映しない法律

東京地裁では、求刑が懲役5年、判決は懲役4年でした。罪名の業務上過失致死傷罪というのは、うっかりとか、誤ってとかというような過失なのです。

疑問に思ったのは、この様に飲酒して車を運転し、人を殺してしまう、こういうことがなぜ過失なのか。それからもう一つは、人の命を奪った場合、殺人罪の場合は死刑、無期懲役あるいは最高15年の有期刑という重い罪があるのに、業務上過失致死傷罪というのは最高刑で5年、併合罪を入れても7年が限度。私たちから見れば全く同じように殺されているのに、こういう違いがあってもいいのだろうかということ。命の重みがもっと法律に反映されるべきと感じました。

一審判決の後、検察側が東京高裁に控訴しましたが、異例といわれました。一審の4年というのは求刑5年の八掛けで満額、非常に重いと。でも我々はとても命の重さが反映された判決だとは思えませんでした。

## ■ 刑法改正の署名活動

今日この会場にも来ています鈴木共子さん、この方も一人息子さんを、飲酒、無免許、無保険、無灯火、警察のパトカーを振り切って暴走した車に後ろから撥ねられ即死させられています。命の重みを反映される法律にと、署名活動を行っていることを知り、私たちもこれに賛同し合流しました。

2000年9月、初めて東京町田というところで街頭署名を始め、メールやインターネットを通じて協力を呼びかけました。北海道交通事故被害者の会からも、約4000名の署名を頂きました。この場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。

千葉、大阪、東京上野、盛岡など各地で街頭署名を重ねるに従い、関心が広がり、励ましの言葉や、ボランティア協力などもいただきました。2000年11月、当時の法務大臣に約16万名の署名簿を提出しました。その時、法務大臣は、重く受け止め、研究者を海外に派遣すると発言。我々は手応えを感じさらに全国的に進めました。多くの方が、自分自身がもし事故に遭ったら、もし事故を起こしたらという気持ちになって、この活動をとらえてくれたことが、大きな力にもなりました。

しかし一方で、そんなに簡単に法律が変わると思っていませんでした。時間が年単位でかかると。ところが、署名簿を2回目、3回目と出すに従って、法務大臣の対応が、本当にこれは早急にやらなければならないというように変わってきました。被害者の声を聞かなければいけないということもおっしゃっていただき、私たちも意見交換会という形で被害者、遺族の声を代弁させてもらいました。



## ■ 「危険運転致死傷罪」成立

昨年の11月、累計で37万4339名の名簿を今の法務大臣に提出させて頂きました。そして2001年11月28日、刑法の改正が行われ、危険運転致死傷罪という罪名が新設されました。危くしくも11月28日は、娘の命日でした。これも、自己主張の強かった娘たちが、自分のことを永遠に覚えていて欲しいという強いメッセージだったのではないかと思います。

危険運転致死傷罪は、酒酔い運転、スピード違反、

故意に行う幅寄せ、割り込み、あおり、信号無視で人を死なせた場合は最高でこれまでの3倍の懲役15年、傷害を負わせた場合は懲役10年ということで、罰金刑や略式起訴は無くなりました。悪質な交通事故犯は過失ではなく交通犯罪であることが法的にも認められたと思います。

改正刑法が施行されて、3月25日までの累計で、全国で50件の危険運転致死傷罪の適用があったそうです。つい最近栃木で、加害者が泥酔して信号で前の車に追突、被害者は2週間の軽傷でしたが、これに危険運転致死傷罪を適用して、懲役1年4ヶ月の実刑判決というケースがありました。かなり厳しくされつつありますが、まだ適用にばらつきがありますので、見守っていきたいと思います。

## ■ 被害者が声をあげること

交通事故の被害者というのは突然被害に遭い、混乱した中で事態が進んでいくわけですから、いつのまにか声を上げる機会を失ってしまいます。

そういう中で私たちが学んだ事は、被害者が声を上げることの大切さです。声を上げないと何もわかってもらえない。最近、札幌でもPTSDが認知されるという裁判がありました。私自身も振り返ってみますと、事故の後ずっと病院にいたのですが、帰ってきて子どもたちの遺品、子どもたちが遊んでいたおもちゃ、座っていたイス、こういった物を片づけていて突然、大声で二人で泣き出しました。今この話をする時にはどうしても涙が出てしまって申し訳ないのですが。あるいは、テレビの中で車が炎上しているシーンを見ると、穏やかではいられないという症状をいまだに起こします。心の傷というのは、お話をしないと外からは決してわかってもらえないと思います。

声を上げなければと思ったもう一つのことは、法曹界の中で自分たちの「常識」がおかしいということを理解していないことです。最近、犯罪被害者給付金制度の改正とか少年法の改正だとか、被害者の立場に立った法律の改正が行われてきていますが、被害者の立場や苦しみが理解され、改善されるような法改正であって欲しいと思います。

## ■ 飲酒運転の撲滅を

これから行うべきと思っていることの一つは、飲酒運転の撲滅です。実は、飲酒運転というのは日常茶飯事で、まだまだ行われている実態が報道されています。法律が出来ても、一人一人の運転手の意識が変わらなければ事故は減りません。とにかく酒を飲んだら運転してはいけない、飲酒運転は悪質な犯罪なのだ、たえず心の片隅に持っていなければなりません。

## ■ 千葉県の交通安全条例

千葉県は、北海道に次いでワースト2、3位というような交通事故死者数が多いところで、昨年、交通安全条例が出来ました。制定の過程で、やはり被害者遺族の意見を聞くべきだと現在の知事が指示をされまして、飲酒運転について、居酒屋とか酒を提供する側にもかなり厳しくなるなど具体的な内容が盛り込まれています。また、この条例のキャンペーンを知事や県警本部長、千葉県議会の議長などが陣頭に立って行っています。私たちも協力させて頂きました。

※ このあとは、郁美さんがスライドを使ってお話しされました。一部を紹介します。

## ■ 「生命のメッセージ展」

飲酒運転など悪質な違反や事故を何度も起こしているドライバーにとっては、厳罰に処されると、自分のせいで家庭も滅茶苦茶になってしまうかもしれないと考える一般的な抑止効果も期待できます。しかし同時に、もっと人間としての根元的なことについても研究しなければと思います。

命の大切さ、重さというものが、すごく希薄になり、簡単に人の命が奪われてしまう。これは交通事故に限りません。人の命を何とと思っているのかという悲痛な思いから、鈴木共子さんの発案で始めたのがこの会場のすぐ近くで開催されている、「生命のメッセージ展」です。

ここに展示されている理不尽に命を奪われた人たちのパネルは、ほんの氷山の一角です。数の上ではどうしても交通事故の犠牲者が多いのですが、リンチ殺人や強盗殺人など事件の犠牲者、あるいはいじめによって自殺に追い込まれてしまった少女の展示もあります。写真やメッセージ、亡くなった人が履いていた靴を見て感じ取ってください。

## ■ 小学校で「命の授業」

命の重さ、大切さを伝える授業をということで、千葉市の小学校5年生、約60名を対象に交通安全特別教室をさせて頂きました。

娘たち、それに同じ千葉県で亡くなられた方とあわせ3人の等身大人型パネルを教材に使って、亡くなってしまった命、その3人がどんな性格だったか、家族はどんなに悲しんだか、事故がどういうふう起きてしまって、どうして事故が無くならないといけないのか、ということをお話させて頂きました。

小学生のみなさんに私たちの話が伝わるか心配だったのですが、当日は音一つたてずにみなさん真剣に聞いて下さいました。後半は時間をさいて作文を書いてもらいました。私たちは彼ら一人一人に家庭へのメッセージになって欲しい、お父さんやお母さんも、子どもにこんな風に言われたら、安全運転をしなければと気持ちを改めて引き締めるのでは

ないか、そういう願いを込めて企画をしました。

## ■ 最後に

(郁美さん) 娘たちはたった3歳7ヶ月、2歳11ヶ月という短い命を駆け抜けるように私たちの元から去って行ってしまいました。でも、亡くなって生きる命もあると最近思えてなりません。理不尽に命を奪われてしまった人のことを知っていた人、彼女や彼を愛していた家族が、声をあげ語り続けることによって生かされる命もあると・・・。

事故から2年半経ちますが、一日とて奏子や周子の存在を感じなかった日はありません。それはおそらく、これから死ぬまで続くのではないかと考えています。同じように理不尽に命を奪われてしまった人たちが沢山います。どうかこの人たちの事を知って、どうか忘れないで下さい。

(保孝さん) 何の罪も無く将来のある子どもたちが、ルールを守らない大人の犠牲になって短い生涯を終えなければいけない、そういう世の中は絶対に無くしていかなければいけない。これは私たち大人の責任だと思います。

私たちの話が少しでも心に残り、悪質な交通事故が無くなるように、ここ北海道で活動をしていって頂ければと思っています。私たちもそうしたいと思っています。ご静聴ありがとうございました。

~~~~~  
※講演記録をもとに編集者の責任でまとめました

## 参加者の声

ぜ ひこういう活動で、交通事故の問題、そして命のことを、子どもたちが考えていく場を作って行って欲しい。毎年何人も人が命を落としているのだから、その人たちの声を結集し、理解したらもっと命についての考えが深まるのではない。(札幌市 男性)

こ れからも、何も言えずに亡くなられた方たちの代弁者として頑張ってください。かなちゃん、ちかちゃんは、お二人の子どもで幸せだったのだなあと思いました。今日はありがとうございました。(札幌市 女性)

北 海道でも幹線沿いに居酒屋が目立つ。ススキノに車で来ている人も多い。飲食店でもお客さんに運転の有無を確認してお酒を出すことでできれば飲酒運転も相当減らせるのでは。飲酒運転に寛容な北海道で何か具体的な活動ができれば、全国にも波及すると思う。

(札幌市 男性)

業 務上過失致死傷罪で処理されるあいまいな法律では事故は減らないでしょう。クルマ社会独自の法律を新設・整備する必要性を強く感じます。正確な事故状況が把握できる器機の開発や装着の義務化の早期実現を強く望むものです。(札幌市 男性)

## 2002年定期総会

### 「交通犯罪撲滅、交通事故被害ゼロ、被害者支援のための要望書」を決める



5月17日、第3回目を迎えた定期総会が、札幌ガーデンパレスで行われました。従来の講演会の他に「メッセージ展」

を同時開催するという慌ただしい中でしたが、20名の出席がありました。来賓の道警交通部交通企画課長、北森繁様、道交通安全協会常務理事、村井謙様のご挨拶を受けたあと、伊藤博明さんを議長に議事が進められました。

2001年の活動報告、決算報告が承認され、2002年の活動計画、予算案も提案どおり承認されました。活動計画の中では新たに「交通犯罪撲滅、交通事故被害ゼロ、被害者支援のための要望書」(一次案)が提案、了承され、今後各方面に働きかけていくことになりました。役員改選は代表、副代表の4人が揃って再任されました。

現在の役員、世話人は以下の方です。

| 役職名(担当) | 氏名     | 住所     |
|---------|--------|--------|
| 代表(会報)  | 前田 敏章  | 札幌市西区  |
| 副代表(総務) | 小野 茂   | 札幌市白石区 |
| 副代表(会計) | 内山 孝子  | 札幌市東区  |
| 副代表(会報) | 内藤 功   | 札幌市中央区 |
| 世話人(HP) | 富岡 裕子  | 札幌市東区  |
| 世話人(監査) | 二宮 章起  | 札幌市南区  |
| 世話人(会報) | 水野美代子  | 札幌市南区  |
| 世話人(HP) | 松井 美香  | 札幌市白石区 |
| 世話人(相談) | 佐川 昭彦  | 札幌市豊平区 |
| 世話人(書籍) | 宮坂めぐみ  | 札幌市中央区 |
| 世話人(相談) | 荻野 京子  | 札幌市清田区 |
| 世話人(相談) | ※水野 親  | 札幌市南区  |
| 世話人(相談) | ※内藤 裕次 | 札幌市中央区 |
| 世話人(総務) | ※佐藤 京子 | 札幌市北区  |
| 世話人     | 長瀬 初美  | 旭川市    |
| 世話人     | ※伊藤 博明 | 深川市    |

※印は、前回以降新しく  
加わった世話人です



### 第1回、けがをされた方の交流会

5月18日の総会に、初めて、けがをされた方の交流会を開催することができました。

けがをされた人の相談を受けている人、交通事故でけがをされたひと、家族を亡くされた遺族の方の出席で始まりました。

「生命のメッセージ展」に来札されたジャーナリストの柳原三佳さんが特別ゲストで出席してくださり、第1回の交流会は意義あるものになりました。柳原さんは、構造的な問題だと思っていると話され、京都のN G Oで後遺症の診断を無料でしている医師の紹介、裁判で介護料を請求している人のお話を具体的にしてくださいました。

以下は参加者の発言です。

- ◆ 軽傷でも後遺症が残り、誰にも理解されない苦しみがある。
- ◆ 病院から診断書がなかなかもらえない。
- ◆ 弁護士が依頼者の希望どおり動いてくれない。
- ◆ 自算会の後遺症診断が低すぎるのではないかな。
- ◆ 医師に再度頼んだら身体障害者の級が上がった。
- ◆ 職場からの帰宅途中であれば労災も認められる。
- ◆ 同じような悩みを持っている人との意見、情報交換の場が欲しい。
- ◆ 女性は年齢が高いと更年期障害で片づけられる。
- ◆ 救いを求める人が、早く解決するように。
- ◆ 交通事故のけがを総合的に診断できる医師がほしい。
- ◆ 交通事故の被害者が調停、裁判で苦しめられているという現状がある。
- ◆ 良い弁護士を紹介してほしい。
- ◆ 当たり前の補償が支払われない傾向にあるのではないかな。



短時間でしたが、たくさんの意見が出され、今後交流を継続してほしいという希望も述べられました。  
(荻野京子記)

※ これを契機にその後も貴重な体験交流会が行われています。予定等については事務局にお尋ね下さい。

「どんな本よりも、いのちの大切さを伝えて  
下さいました」・・・参加者のこえ

5月17～19日 「かでる2・7」

## 生命のメッセージ展

主催「生命のメッセージ展」北海道実行委員会



### 愛する家族へ

僕らは  
初めて海を渡り  
5月の北海道を訪れた

柔らかなひざしと  
快ちよい風

僕らは  
いっぱい自然を満喫し  
役目を果たす

北の大地に蒔いた  
僕らの命の種は



いつか  
きくと

ライラックよりも  
見事な花を咲かせるだろう

輝け いのち



鈴木共子

### 「メッセージ展」を終えて

実行委員長 白石区 小野 茂

この話が出ましたのは、今年の2月10日の「北海道交通事故被害者の会」の会議です。毎年の総会の時に講演会を開いていますが、今年の講師に井上様ご夫妻をお呼びしたらという話になりました。そして、井上さんは「生命のメッセージ展」に関係していらっしゃるの、これを機に北海道でメッセージ展を開こうという事になり、言い出しっぺということで実行委員長になった訳です。

その翌日の11日から走り始めました。文書を作って後援を依頼し、行政やその他色々なところを回りました。しばらく走り回ってましたら妻に言われました、「お父さん何でそんなに一生懸命するの？」



と。それで「俺もわからないのだけど、子どもが応援している」と言ったのです。息子は人の命を預かる臨床工学士をしていました。私は息子と同じ仕事は出来ませんが、代わりに命を守る仕事を息子から引き受けたような気がしています。

開催すると息子を知っている人がずいぶん見えられ、言葉をかけて頂きました。「小野さんの息子さんのパネルどこにあるの？」と聞かれました。「実は、パネルを私はたぶん見られないのです。でも、みんなの気持ちがよくわかるから、メッセージ展を開きたかったんだ」と言いました。

メッセージ展を黙って見ていますと、一人一人が一枚のパネルをしっかりと読んでいます。一枚のパネルの中に一人の人生が入っている訳ですね。そして自分にもそういう人生があるのだということに気がついて頂いて、自分の命を大切にしたら、他の人の命も大切にすることではないかと思いました。

亡くなった人は直接訴える事が出来ません。私たち遺族は、その代弁者としてメッセージを送ります。そのことが、その方々の死を無駄にしないことなのではないかと思っています。そういうふうにして一生懸命行動することが、実は息子の生命が私の中に引き継がれているんだなという気がします。

開催を終えてから、最初に思ったことは「子どもは喜んでくれたらどうか。見ていてくれたらどうか」でした。オブジェへの参加もせず実行委員長を引き受け、意気込みのみで走り始め、3か月の短い準備期間での開催は不安一杯のものでしたが、3日間の来場者は1800名以上、そして一人ひとりが真剣にオブジェを見入る姿は「開催して良かった」と強く感じさせました。

会場へ足を運んだ方が家族で、職場で、学校で「生命」について話し合い考えるきっかけになることが今回の目標でもありました。終了後展示会に足を運んでくれた方、出展者から電話、Fax、手紙などがあり、その目標も達成されたのではと思います。次回を望む声も多くあり、今回をどう生かし発展させて行くか、新たな出発点であると思います。多くの方々に協力を頂き、無事終えることができ感謝申し上げます。

## 『生命のメッセージ展』に託す想い

「生命のメッセージ展」実行委員会 代表 鈴木 共子

昨年3月に16体でスタートしてから1年ちょっとで、こんなにも大きく成長した「生命のメッセージ展」です。産みの親としては、我が子の誇らしき成長を見る思いがして感激しております。

理不尽に愛する家族を亡くされた遺族の方、またそうではない方もいらっしゃると思いますが、どうぞ共に遺族の方々が語る、亡き愛する家族の代弁者としての想いを聴いて頂きたいと願っています。それぞれお話して下さる方の側には、亡き愛する者がいます。応援してくれることは間違いありません。

今私たちは  
無言のあなたがたの想いを  
ことばにして  
語ってみよう



無念さばかりが  
はきだされ  
息苦しく  
なるやもしれず

涙で声がふるえ  
ことばにならないかもしれず

それでも私たちは  
あなた方の想いを  
伝えねばならぬ

しぼり出すことばの  
ひとつひとつが  
あなたがたの悲痛の  
叫びでもあり  
私たちへの慈しみでもある

いとおいしい  
いとおいしい  
私たちの愛する者よ  
さあ、傍らに立ちて  
残されし者たちに  
魂のことばを  
語らせよ

まず息子の事件のことから話させて下さい。

一昨年(2001年)の4月9日、私の一人息子、鈴木零と友人の丹野一平君が歩道を歩いていた所を、飲酒、無免許、無車検、無保険、おまけにスピード違反の暴走車に後ろから

激突され、二人とも殺されました。息子は1年間の浪人生活を経て、憧れの早稲田大学第一文学部に合格し、入学式を終えての事故、いえ事件です。予備校で知り合い意気投合し、生涯の友となるはずであった親友の丹野一平君と共に、夢を語り合いながら、我が家に向かっていく途中の出来ごとです。ちょうどその現場が橋の上で息子は19メートル下のコンクリートの土堤にたたきつけられたのです。

あろうことか息子も一平君も共に母ひとり子ひとりの母子家庭でした。「息子命」とただただ我が子の幸せを願い、我が子のためにとがんばってきた私たち母親から、一瞬にして最愛の我が子が奪われてしまったのです。

## 零と一平へ

満開の桜が  
最初の花びらを  
散らせる頃

君たちは  
飲酒、無免許の  
暴走車に  
はねられて  
一瞬にして命を奪われた

人生のスタートラインに  
立ったばかりで  
前途は  
まばゆいばかりの19歳

母たちの慟哭の声を  
君たちは  
どんな思いで聴いたのだろうか

## いったい何の役割が

聖書には  
「この世に生まれし  
すべての人に  
役割あり」と  
説いている

19才の無惨な死  
そこに何の役割が  
あるというのか

たとえあるにせよ  
我が子の生命  
守れなかった  
母の絶望は  
日に日に  
深まるばかり

あまりにむごい  
仕打ちの様に  
母は神を否定する

犯罪被害者遺族となって様々な理不尽な体験をさせられることになるのですが、一番許し難かったのが、加害者の裁かれる刑のあまりの軽さです。飲酒、無免許、無車検、無保険、スピード違反という悪質の極みのドライバーに科せられるのは「業務上過失致死罪」で、その最高刑がたった5年の懲役だということです。あきらかに、あきらかに殺人なのに、なぜ業務?なぜ過失?納得できませんでした。

遊びで運転しても、無免許で運転しても、何人殺しても、みんな業務上の過失として裁かれると知ったときの驚きと憤りは言葉で言い表せません。後で命とは関係のない「窃盗罪でも最高10年」「詐欺罪でも最高10年」と聞いて、我が耳を疑いました。

## 生命の重み

地球より重たいはずの  
生命の重み  
でも  
この国の法律では  
米粒ほどの軽さしかない  
数字なんかで表せやしない  
なのに  
数字でしか求めることのできない  
このもどかしさ

だれが生命の重みを  
計ることが出来ようか  
神とて至難の技であり  
ただただ  
我が子の生命の重みを  
計ることが出来るのは  
生命産み出したる  
母ひとり

警察での事情聴取を終えて、事故の衝撃で脱がされ飛ばされた息子の遺品の運動靴を抱えて帰る道すがら、それは風のささやきなのか、私の想像か定かではありませんが、息子の声が聴こえたのです。

「共子さんやってくれよ。あなたなら出来る。俺たちの為に。かけがえのない命のために・・・。」

その時私は決心したのです。理不尽な法律を変えよう。息子たちの死を無駄にしないために。「命の重み」がきちんと反映されるように法律を改正してもらおう。零君や一平君が生きていれば成しえたであろう彼らの仕事としてやり遂げよう・・・。

それが井上夫妻と合流しての「悪質ドライバー」に対する量刑見直しの署名活動です。

署名活動をハードとするなら、ソフトな活動として企画したのが「メッセージ展」です。

思えば、事故後初めてのお正月。辛くて悲しくて苦しくて、ずっと一人部屋にこもっていました。朝からお酒を飲んで、号泣しながら見えない息子に話しかけていました。「なぜ死んじゃったの？なぜ？」と答えのない問答をしていた時、ふとひらめいたのが「メッセージ展」のヴィジョンでした。そしてまた私には聴こえたのです。「共子さん、あなたなら出来る」と。それからアトリエにこもって狂ったように模型を作りました。

それがこんなに早く、そしてこんなに大きく展開していったということは、見えない天国の彼らの大きな力を感じています。開催ごとに参加者が増えていくのは悲しいことですが、理不尽に奪われた命はこんな数ではありません。そして、今この瞬間にも新たな犠牲者が増え続けているのです。

メッセージ展の主役は理不尽に奪われた命たちです。犯罪であれ、事故であれ、いじめ自殺であれ、医療ミスであれ、一気飲ませの犠牲者であれ、いずれもその死の原因を社会問題として考えていかなければならない犠牲者たちです。原因はどうであれ残された遺族の悲しみ、苦しみは一緒です。

私たちの共通の思いは、亡くなった家族の記憶をいつまでも持ちつづけたい、存在を忘れずに知って欲しい、事件、事故の事実と原因を風化させたくないということです。私たちは亡くなった家族が、人々の記憶から薄れ、忘れ去られることが一番辛いのです。

それが等身大パネルとなって愛する家族が蘇り、新たな生を受けて彼らしか出来ない役割、「命の重み」を伝えるという大事な役割を担って、全国へ旅立つのだというファンタジーは、私たち遺族の慰めにつながります。そこには悲しみを越えて、前向きに生きていこうとする残された家族の精いっぱい姿があるのです。

## 命

太古より受けつがれし  
我が命  
ひとりの命の時は  
星の輝き  
その一瞬の輝きは  
生への喜び

命は  
奪われてならず  
奪ってもならず  
自明の理であるはずなのに

今  
偏西風によって  
命たちの悲鳴が聴こえてくる  
気がつけば  
足元からも  
命たちのうめき声が響いてくる

母の胸に抱かれた  
幼い命  
明日へのエネルギーを  
放出させていた  
若い命  
頼られる存在として  
凛として家族を守る  
成熟した命

精いっぱい  
自らを輝かせていた命たちが  
想像力が欠落させた心が  
容赦なく奪い去る  
残された者の  
嘆きかなしに思いをはせられぬ  
愚かな者たちよ

戦争？テロ？犯罪？  
交通事故？  
Etc. Etc. Etc. Etc. Etc. Etc.  
様々な名で呼ばれようと  
無慈悲に  
命の輝きは消されてしまう

理不尽な凶器がまかり通る  
この闇の時代  
嘆くばかりでは  
命は救えないのだ

命への愛しいつながりを  
身悶えする殺人の  
連鎖としてはならない

命の源はひとつ  
あなたの命は 他者の命であり  
海を超えた彼の地の命とつながる

まずは  
あなたの隣の命と手を結び  
「命を守ろう」と、伝えていこう

つながれ、つながれ、  
いのち

「生命のメッセージ展」で蒔いた  
種は  
未来の人が刈り取ります

私たちは種の番人  
身が結ぶ未来を夢見ています

その実が  
未来の人々の  
恵みとなるように

つながれ つながれ  
いのち

「生命の重み」を伝える  
大事な役割を担った  
犠牲者たちの  
新たな 生命の証し

今 芽生えの時・・・

つながれ つながれ  
いのち



※「理不尽に生命を奪われし者からのメッセージ」(5/19「かでの 2・7」での講演記録から編集者の責任でまとめました


 天国への手紙

**健**くんが天国に行ってしまったから10年がたちましたね。涙をこらえるのは少し長くなったけれど、思うたび胸がつまります。なぜ健くんが脇見運転にはねられ30日間意識のないまま天国に行かなければいけなかったのか。たくさんの人が歩いているのに、なぜ、何も悪いことをしていない健くんが……。まだ言葉としては一般的ではないけれど「交通殺人」としか言えませんね。

10年たったけれど、お母さんはなかなか強くなれません。でもみんな健くんの分もちゃんと頑張って生きて生きていくからね。また天国で会いましょう。そしてこの次生まれ変わったら、またお母さんの子どもになって下さいね。約束だよ。

この展示の中に、健くんがいたような気がしました。



### 寄せられたアンケートより

**胸**が熱くなり、どうして、どう表現していいかわかりません。生きている事だけでも、しあわせなのですね。

小さな悩みに死を考える事もある日があったけれど、今日ここへ来て力を頂いた気持ちです。無念で亡くなったみなさんの分まで生きて行きます。ありがとうございました。(30代 女性)

**飲**酒、いじめ、スピード違反等で亡くなった方々。警察の対応に怒りを覚えるものも多かったです。

亡くなった方はもう戻ってきません。しかし、加害者はそれを一瞬で忘れ生活しています。許しがたいと思っています。亡くなった方々の分まで生きてください。それは亡くなった人たちと共に生きていくということにもなるでしょうから。(17歳)

**私**は今、生命のつぐないをしています。加害者でもあり被害者でもある自分。1人でも多く車にのることをやめて歩いて下さい。1人でも全国1を返上しよう、自分に課せられた問題です。

朝いって来ますといったまま帰ってこなかった君！朝ピカピカ1年生の入学の日「おめでとう」の

あいさつに「ありがとう」が返ってこなかったあなた！。おじさんは今、スピードを出さない車をお願いしています。メーカーさんは考えてくれます。

**亡**くなられた人の衣服や履き物と写真を会場に入るなり見たとたん、息が詰まりそうになりました。大変インパクトが強いです。今後、この活動を通して飲酒運転、無免許運転が少しでも無くなりますよう祈ります。私は無宗教ですが、本当に祈りたいです。(30才代 女性)

**い**のちって何だろうと思ひ参加させていただきました。どんな本よりも、いのちの大切さを伝えて下さったと思ひ感謝しています。

私はうつ病で、私なんか死ねばいいのにとか、消えればいいのにとこの言葉が呪文のように頭の中を駆けめぐるような状態のものです。遺族の方々のお話を聞き、自分の母が泣いているところを想像しました。生きていることを感謝したいと思ひました。

**見**ているとすごく辛くなって涙が出そうでした。こんなにも多くの方が「交通事故」で亡くなってたなんて知らなかった。だから私は未来に向かって生きていきます。(小学生 女性)

**心**にずしんと響きました。交通規則というより人間としてのモラルの無さで人が殺されている！もっといっぱいの人に見てもらいたい。(60才代以上 女性)

**大**切な人を奪われた家族にとって、「故意ではない」は理由にならないと思ひます。色々な運動に少しでもお役に立ちたいです。(40才代 女性)

**一**人の人間の命の重さを強く感じずにはいられませんでしたが、少しでも、今このときから逃げたいと感じた自分に、深く深く反省させられました。

(20才代 女性)



**毎**日、当たり前のようにテレビ、新聞で報道され、視聴者、読者だけでなく、アナウンサーや記者をはじめとする報道関係者も「またか」という顔になってしまう交通事故。実はその陰で、かけがえのない肉親を失っている。今回は改めて事故の「原点」に立ち返ることが出来たようにも思う。

(20才代 男性)

**私** も5歳の時に交通事故で死にかけた事があります。今思ってみればなぜ自分は助かったのかと、今日のメッセージ展を見て思いました。今の時代は交通事故で死ぬ人の他に、いじめや不況の影響で自殺する人も少なくありません。そんな人達の為に私達は何を考え、何をしなければいけないのか真剣に考えるのが、このメッセージ展だと思います。  
(20才代 男性)

**そ** の原因とするところ色々あろうけれど、要するに運転する者の心がけ一つで防げるとするならば、その人間は運転不適格者(欠陥人間と認識すべき)であり、免許は即刻取り上げるべきである。  
(60才代以上 男性)

**私** は昨年9月に日本へ来たばかりですから、今でも自分の感想を日本語で話せませんが、このメッセージ展に本当に感動しています。私は今日たくさんビデオを撮ってメモをして、自分の国、中国へ文章を書くつもりです。生命のメッセージ展の事を紹介したいです。どうもありがとうございました。  
(20才代 女性)

**ト** ラックは運転者が守られていると思った。本当に小さい命を守る力量のある人にだけ運転して欲しい。  
(40才代 女性)

**過** 去に、ニュースや新聞で知っている事故もあれば、初めて知る事故、感じることは非常に大きいです。私の日頃の持論は「人を殺したら自分も死ぬ」過失であっても十分な刑は受ける。日本の法律の「無期刑」は米国のように終身刑とすべき。日本は悪人に甘い。病的だとか、その人の今後のこと、そんな事は被害者には関係ありません。無くしたものは帰しません。もっと極刑を設けることを希望します。  
(40才代 男性)

**出** 来る限りこういうことを続けて行って欲しい。光らなくなった星達の上に、私達がみんな生きていて事を認識する場として、とっても有意義だと思います。  
(高校生 女性)

**私** は現在、札幌市内の病院で医療ソーシャルワーカーとして働くかわら、法学部(通信制)の学生でもあります。卒論で犯罪被害者について勉強しています。どうしても理不尽なことの多すぎる今の状況に納得がいかず、自分で調べたいと思ったからです。精神、心神喪失・・・なぜ彼らがそこまで守られて、被害者がそこで終わってしまうのか。被害者は殺され損だなんて世の中は決してあっては

いけないと常に思っています。(30才代 女性)

**交** 通事故で身内を亡くしました。加害者のドライバーは誠意のある対応をしたと思いますが、それでも遺された者の気持ちは晴れる事はないのです。ドライバーへの恨みは感じることは無くなって、入学するはずだった年になると、成人式の年になると「もし生きていれば」と思わずにいられません。「メッセージ展」に来て驚いたのは、加害者側に全く誠意が無いという話の多さです。家族を亡くした悲しさに加えて、加害者への怒りまでも抱えていらっしゃる遺された家族の方々の気持ちを考えると、本当はいけないのかもしれませんが、怒りの気持ちで心がいっぱいになります。(30才代 男性)

**も** う少し長く展示して欲しいです。友人を誘いたかったので。(20才代 女性)



右の写真は、7月13日、大麻高校の学校祭での「生命の声が聞こえますか?」という展示の一コマです。

メッセージ展に足を運ばれた佐々木晴夫先生の企画です。



## 会 の 日 誌

### 《会合など》

- 4月10日 会報8号発行
- 5月10日 第37回例会
- 5月18日 2002年定期総会、講演会  
5月17～19日「生命のメッセージ展」
- 6月10日 第38回例会
- 6月24日 臨時学習会(講師:浦野道行氏)
- 7月10日 第39回例会
- 8月9日 第40回例会

### 《訴えの活動》

「心に響け被害者の声! 100万人講習」など

▲ 4/23 恵庭ハイテクノロジー専門学校

5/14 北広島西高校(佐川)

▲ 4/26 恵庭北高校(小野)

▲ 4/26 苫小牧総合経済高校 5/1 琴似工業  
高校定時制 5/23 札幌手稲高校

7/25 中央区安全運転セミナー(前田)

処分者講習での講師

4/25 小野 5/16 内山 6/27 前田 7/25 佐川

## メッセージ展での訴え **真実を、命の尊厳を** 室蘭市 高橋 利子

私の娘、真理子は、2001年10月8日、室蘭から札幌へ向かう高速道路を走行中、担当警察官によりますと左側から突然飛び出てきた小動物、おそらくキツネであろうということでしたが、これを避けようとハンドルを右に切り中央分離帯に衝突。追い越し車線に横向きに停止しました。後続車1台目は約100メートル手前に停止し、ハザードをつけて合図をしてくれたにも関わらず、約2分後に3台目の加害者の車がなぜか追い越し車線をブレーキもかけず、減速もせず前方不注意のまま追突。シートベルトをはずし携帯電話で連絡しようとしていた様子のある娘は、この激突車により頭部を損傷、34歳の生涯を終えてしまいました。

娘、真理子は看護師を一生の天職としつつも向上心を持ち、これからはお年寄りの為に尽くしたいと仕事の傍ら通信大学で福祉の勉強を始めておりました。同じ職業を持つ私とはよく話し合ったりしていましたが、いつも心を込めて患者さんのために尽くしていると、看護師として人間として成長してきたなとうれしくもあり、親として密かに誇りでもありました。一体どれほどの方々の手を握り励まし、そして最後を看取ったことかと振り返ります。

そんな娘が自らの最後はたった一人で、誰に手を握られる事もなく、無惨で理不尽な死を迎えてしまいました。なぜ、どうして、何があったの、どんなにか恐怖の中にあっただかと思うにつけ、辛くてもすべてを知ることが私の努めであると信じています。「お母さん聞いて、こうなの、ねえねえ聞いて」いつもあの子の声がします。

目撃した方にお会いしたい、これは私の中でごく自然な事なのです。しかし、「裁判に関わる事ですから教えられません」と言います。誰の為の、何の為の裁判なのでしょう。不起訴になると何も知る事は出来ないといひます。これではいくら冥福を祈っても、娘の魂は浮かばれません。

3月3日、北海道新聞に広告を出しました。目撃された方へどうか申し出てくださるようお願い致しましたが、何も反応はありませんでした。わずか2分間でしたが、娘の命を守ろうと合図をして下さった方にどうしてもお会いしたい、どんな小さいことでもあの子の事を教えて欲しい。私たちは高速道路管理課へお願いをし、各エリアの掲示板にポスターを貼って頂く事になりました。

5月2日に解剖鑑定書が大学から届いたとの知らせがありました。この解剖については私と娘は以前から話し合いをしていました。決して何があっても解剖はしないで欲しい、それがあの子の望みであり、遺言でもありました。その言葉を守れなかった私は、本当に愚かな母親です。一日半も待って、やっと引き取った娘の体には、頭蓋骨は

はずされたまま包帯をグルグルと巻かれ、首のすぐ下にも包帯が見えましたが、それ以上見る勇気はありませんでした。

あの事故の後、知らせを受けて駆けつけた病院のベッドで会ったあの子は、実に安らかな顔をしていました。ほとんど傷らしいものはありませんでしたが、左の耳から流れるおびただしい血によって、頭全体がドロドロに汚れていました。私はその頭を撫でながら「かわいそうに、ごめんね、お母さんが悪かった、守ってあげられなくて悪かった、家に帰ろうね、綺麗に洗ってあげる」と何度も言いました。それなのに帰ってきたあの子には洗ってあげるべき髪の毛は無く、その無惨な姿にただただ申し訳なくて謝ることしか出来ませんでした。せめて、解剖の所見、鑑定書を見せて欲しい、あの子に報告しなければ、あの子もきっとそれを望んでいるはずと思い、警察の方をお願いをして承知してくれました。その後も何度も担当の方をお願いを致しました。でも、7ヶ月もたってようやく出来上がったそれは「裁判に関わるので見せられません」との返事でした。そして、死亡原因をちょっと述べられましたが、到底納得できるものではありません。自らの体を切り刻まれてしまった娘は知る権利があり、それを行った方々には報告の義務があるはずで。それが亡くなった者への尊厳ではないでしょうか。ここにも裁判という言葉が出て参ります。誰が何をどう関わるのか、私にはわかりません。ただ私が知りたいのは娘の最後の様子であり、手を握って優しい言葉をかけてあげられなかった事へのわびなのです。そしてなぜ、解剖で遺族は立ち会えないのか、これもまた私は疑問に思っております。



娘が旅立ってから心から笑える事は何一つ無くなりました。せめてあの子の為に何が出来るのか、そればかり考えて生きています。

この苦しみの中、全国のそして北海道の被害者の会を知り、どれほど私たち家族が救われたことが計り知れません。より多くの苦しんでいる人々が、この会により、少しでも救われる事を願っています。そして、今この生命のメッセージ展に出して頂いている娘、真理子が、多くの方々と共に新しい天職として生命のメッセージを送り続けて欲しいと願っています。お母さんは及びませんが手伝いたいと思っています。

今日はどうもありがとうございました。

前記 5/19 の「理不尽に生命を奪われし者からのメッセージ」での講演記録から編集者の責任でまとめました

## 会員のお便り

## あれから23年

真狩村 気田 光子

## 今でもやりきれない思い

ようやく夏らしい毎日となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。いつも連絡をいただきながらごぶさたばかりで申し訳なく思っております。「癒されぬ輪禍」に自分の思いをつづって、あの事故の時からくすぶっていた思いが吹っ切れてすっきりするだろうと思っていました。しかし、思い出し書いたことで、忘れかけていたいろいろなことが頭から離れなくなりました。

あれから23年ですが、つい昨日のこのように浮かびます。他の人に話しても「なんで今頃？」と言われるので、話すつもりはありませんが、仕事から帰って一人になると涙が出て眠れない日が続くのです。ひき逃げの相手に対して、私たちが家族の夢も失い、こんなに苦しんで生きてきたのに、何の罰も受けずにいるなんて……。23年すぎた今でもやりきれない思いです。とうに時効は過ぎて、どうしようもないことは十分わかっているのに、憎い、許せないという自分の気持ちをどうしていいのかわからないでいます。昨日のドラマの中で死亡交通事故を起こして逃げた犯人を時効後に偶然知って復讐していくという内容のものがありませんが、我が家の場

合も、出来ることなら相手の家族に同じ苦しみを味わって欲しいと思いました

## 説明のできない悔しさ

主人は36歳で職場をなくし、重度の障害で授産施設に入所しています。「俺、なんでこんなふうになってしまったんだべ」一番やりきれないのは主人だと思うのですが、主人に聞かれても説明が出来ません。あの時の警察の態度も何一つ納得するものがなく、何度も聞きに行きましたが、半年もすると何しに来たという態度で「捜査したが見つかることができなかった。自賠償をもらえるだけで有難いと思って諦めなさい」。主人の職場、主人の兄弟にも圧力をかけてくるようになり、このことも何故なのか今も理解できずにいます。当時小さかった子どもたちに聞かれても納得のいく説明が出来ません。

長々とすみません。この状態からどうやったら抜け出ることが出来るのかわからず悩んでいます。自分の気持ちが落ちついたら会の活動にも参加したいと思っています。皆様くれぐれもお身体に気を付けてお過ごし下さい。

気田さんは「癒されぬ輪禍」に「あの日から」という手記を載せています

## 報告 控訴取り下げ、代理監督者責任が確定 中央区 斎藤 千穂

殖産運輸社長が控訴してきた控訴審(詳細は前号)第1回が、5月28日にあり、父の遺影を胸に出廷しました。が、控訴をしておきながら、社長村山ミヤ子は法廷に現れず、損保会社の弁護士だけが出廷して裁判が始まりました。殖産運輸側は副社長の証人尋問も申請してきました。私たちは、副社長の尋問を積極的に活用し、加えて社長の尋問も申請しようとしていました。一審の札幌地裁が退けた社長の不法行為709条も、高裁では正しく審議されるよう準備をし、2回目の裁判が6月25日と指定されました。

しかし、6月4日、殖産運輸はA4判1枚の取下書に、「都合により控訴の取り下げをいたします」の1行で、控訴を取り下げました。

この裁判を通して見えてきたのは、殖産運輸の社長村山ミヤ子は自分の金銭の損得しか考えていないということでした。社長の自覚も責任もない控訴と控訴取り下げに、父の死を悼むこともなく、その後の事故のない社内体制作りをしようもしない、社長の態度が見られます。また、この裁判を通して、

司法の問題点も大きく見えてきました。

- 1 社長が謝罪に来ない事実を認めながら、一審では不法行為には当たらないとしたこと
- 2 虚偽の事故報告書に関して地裁判決文は、一切ふれず、審議も行っていない
- 3 一審地裁判決が社長に支払えと命じた損害賠償金200万円は、判決は確定したが賠償金の強制執行権はなく、支払えと命じた200万円は消滅した。

以上の問題点に関しては、次号の会報で、詳細をお知らせたく思っています。そして、社長は今も謝罪に訪れません。

しかし、3579名の方の署名及び札幌高裁に向けて命のメッセージ展で集めた330名の署名、またわざわざ5月28日の控訴審に署名を届けてくださった方のお気持ちこそが、これから交通事故をなくすために運送会社社長の責任を問うていく大きな社会的な力となっていくと思います。亡き父と共に、お礼申し上げます。ありがとうございました。

ここ数年来「癒し」が大変なブームだ。癒しスポット、癒しグッズ、癒し系芸能人。至る所に「癒し」が氾濫している。ほとんどリラククス効果と同意語のようなものだ。それらは人から場や物を与えられ、最初からセッティングされた中での、徹底的に受け身なものだ。

私が被害者の会の活動を最初に始めるきっかけとなったものが『癒されぬ輪禍』である。だからこそ「癒し」という言葉に対して特別の思いもあり、あまり安易な使い方をして欲しくないというのが正直な気持ちだ。

街に溢れる「癒し」には危険もいっぱい。カウンセラーやセラピスト、マッサージ師やエステシャン、店員……。技術以上の精神的なプラスアルファを求めるあまり、彼らの言動にひどく傷つけられることもある。それは家族や友人でも同じ。悪意のない、些細な一言に必要以上に落ち込んでしまう。

だが、意識的にも無意識的にも、他者の言動に反応するのは他でもない自分自身。外には冷たい風ばかりでなく、暖かい風も吹く。今立ち止まっている所から一步踏み出すのはとても勇気のいることだが、そこから得られることも多い。

「生命のメッセージ展」では、真っ白なオブジェと共に、数々の小冊子や書籍も置かれていた。辛い体験を文字にして向き合う作業もまた苦悩の連続だ。しかし、そうして生み出された作品は、幾多の来場者の手に渡り、新たな命の連鎖となった。



### 「交通事故鑑定人 - 鑑定歴50年、駒沢幹也の事件ファイル」

柳原 三佳 角川書店 2002年

当人しか知り得ない事件の真実。特に一方が亡くなってしまった場合には、相手の証言に誤りがあっても、自ら指摘することはできない。そのため、事故の痕跡の検証・鑑定が必要になってくる。しかしいくら事故の痕跡が真実を語っていても、それを受けとめ読み取る力がないと、様々な悲劇を呼ぶことになる。駒沢氏は、証拠の保全のため、泣くのを半日我慢して現場に行き、できるだけ写真に残し、衣服などの物証もできるだけ保全しておくよう勧めている。ずさんな初動捜査や、加害者の自己保身の嘘に苦しめられないために。

### 「悲しみがやさしくなるとき 子どもをなくしたあなたへ」 エリザベス・メーレン

白根美保子、福留園子訳 東京書籍 2001年

「お子さんは何人いますか？」そう聞かれた時、あなたならどう答えるだろうか。悲しみの渦中にある時、誰もその悲しみが永遠に続くかのように思ってしまう。本書では子どもを亡くした親の場合、

自然の法則に反したための心構えのなさや、保護すべき子どもを守れなかった罪悪感、アイデンティティの喪失を挙げ人間として経験し得る最も辛い出来事の一つとしている。かけがえのない愛情の対象を失った時に、心身に起こる様々な反応は自然な

ことである。何かと否定されることの多い、私たちの悲しみの過程を肯定し、優しい気持ちにさせてくれる一冊。  
(書籍係 宮坂)

### 編集を終えて

七月末、札幌での交通安全セミナー。この種の講習には珍しく、合間にさだまさしの「償い」が流された。横断中の人を轢いて、被害者の奥さんに毎月送金をしていた青年が、七年後、「誠意はわかりました。主人を思い出すのが辛いからもう送金はしないで下さい」という手紙をもらって感謝するという歌詞である。受講者はしばし聴き入り、会場にはやわらいだ空気が漂った。次の講師は私。テーマは「命とクルマ、『遺された親』からの訴え」。「償い」についてふれざるを得ず、次のように切り出した。

「7年前に歩行中の高2の娘を『前方不注視』で轢いた加害者は、刑事裁判が終わるまでの3か月は足繫く通って来たが、執行猶予のついた判決後は、お参りにも一切来ないという不誠実な「人」だった。しかし、仮にこの「人」が歌詞のように誠実な人であっても、それでもなお、私は許すという気持ちにはなれないだろう」と。今年の3月、北海道新聞の「いずみ」欄に「償い」という一文が載った。

10年前小1の子どもさんを脇見運転の車に轢かれて失った高橋香澄さんは、ラジオから流れる件の曲を聞いて、ただただくやしくて号泣した。「たぶん普通の人なら、その青年の『誠意』に涙するのだろう。加害者もまた被害者と思うのだろう」と。10歳の長男をトラックに奪われた京都の今井好子さんは「経済の発展を最優先とした国策をとる日本社会では、暗黙のうちに被害者に耐え忍ぶことを美德として押しつけ、悲しみや怒りの気持ちを表現し、また正当性を自己主張するものを排斥してきたのではないだろうか」と指摘する。「遺された親」の訴えを次のように結んだ。「犠牲者の身になって考えて欲しい。理不尽に奪われた命は、決してあがなえない。『償い』は、犠牲を無にせず交通犯罪ゼロの社会を実現すること。『事故だから』と加害を容認する『クルマ社会』を問い直し、安全確認最優先の運転を。」(前)

**例会は毎月10日、10時～12時、事務所で行います。会員の方、又は入会希望の方は、相談・交流もできますので、気軽にお越し下さい**

予定 9/10(火)、10/10(木)、10/26(土)、  
11/11(月)、12/10(火)、1/10(金)...

印のみ「かでる2・7」で13:30～16:00

**次の会報発行は1月です。手記や意見、近況などの投稿をお待ちしています。**

(※切 12月20日、1200字程度、郵送、FAX またはEメールで事務局へ)

**会が主催する「フォーラム交通事故・」は11月15日(金)18時～「かでる」です。詳細は後ほどお知らせします。**